



編集委員会がオンライン開催となったのは、新型コロナウイルス感染症の流行が首都圏に広まり始めた2020年3月だった。いずれ2~3ヵ月もすれば集合会議にもどると思ったものだが、いつの間にか四季はめぐってすでに1年を超えている。

最初は窮余の策だった。精神神経学雑誌の論文審査は、編集委員1名と委員以外の1名の計2名の査読結果をもとに委員会全体で審議する。貴重な原稿を寄せていただいた投稿者を長く待たせることがないように委員会は毎月開催している。集合できないからにはオンラインで行うことにおのずとなった。しかし始めてみると意外に悪くない。

まず予想以上に集合会議を代替できる。委員会は、編集委員、編集事務局員（編集実務担当の若手会員）および学会事務局担当者、これら合わせて20数名程度が毎回の出席者である。これくらいの人数だと相方向性を保った議論が、機能的には十分に可能である。集合会議に比べると発言が減る傾向があるとはいえ論文審査はいままでと同様にできている。

またオンライン会議のメリットとしてよく指摘されるように、時間効率に格段に優れている。集合会議のときは、編集子は徳島から空路上京し、モノレール、電車、地下鉄を乗り継いで本郷の学会事務局で委員会に参加し、逆をたどって徳島へ帰る。往路は委員会資料に目を通す時間として有効活用できるとはいえ、1日がかりの仕事になる。これがオンラインになると職場や自宅から直接会議に入ることができる。すると都合もつけやすく、時間の余裕ができて今まで以上に資料にしっかり目を通せる。おまけに経済的でもある。委員の仕事は無報酬だが、交通費は実費支給されるので、全国各地から参加する委員の交通費分だけ学

会経費の節約になる。

集合会議を機能的に代替できて、時間と経費の効率性に優れている。となると新型コロナウイルス感染症終息後も、会議はもはやオンラインとなる可能性がある。だが集合会議はまったく不要となるのだろうか。

2020年は精神神経学会学術総会もオンライン開催だった。充実したプログラムであり、興味のある講演を好きな時間に視聴できるメリットもあって、これまで以上の参加者があったと聞く。研究成果や臨床経験が発表され、質疑応答もできて、総会に求められる基本的役割は十分に果たしていた。しかし感染終息後も毎年オンライン学術総会となってよいだろうか。実際に集合すれば、興味と関心を共にする者同士が、成果を認め合い、経験を労い合い、交流や懇親を深め、旧交を温め合うことができる。挨拶を交わしたり、会食したりすることもできる。そのようないわばサロンのないし社交的な側面を通して、連帯感が生まれ、士気が高まる。集合するメリットは、機能や効率とは離れたところで、実はとても貴重なのかもしれない。

オンライン編集委員会が1年以上にわたり十分に機能しているのは、集合会議時代に醸成された連帯感と高い士気が下地にあるからこそかもしれない。オンラインでは、デジタル信号は十分に通るが、うなずきや沈黙などのアナログ信号は伝わりにくい。その場の熱気や和気なども広まらない。オンラインだけでは1つの仕事を共に成すための連帯感や高い士気は生まれにくいように思われる。

遠からずコロナ禍も終息する日がくるだろう。そのときもオンライン会議の機能と効率を利用しない手はないが、集合会議もやはり捨てがたいと思う。

大森哲郎